

町内の二天才

坂口安吾

青空文庫

魚屋と床屋のケンカのこと

その日は魚屋の定休日であった。金サンはうんと朝寝して、隣の床屋へ現れた。

「相変らず、はやらねえな」

お客は一人しかいなかった。源サンはカミソリをとぎながら目玉をむいて、

「何しにきた」

「カミソリが錆びちやア気の毒だと思つてな。ハサミの使い方を忘れました、なんてえことになると町内の恥だ。なア。毎月の例によつて、本日は定休日だから、オレの頭を持ってきてやつた」

「オレはヘタだよ」

「承知の上だ」

「料金が高いぜ」

「承知の上だよ。人助けのためだ」

「ちよいとばかり血がでるぜ」

「そいつはよくねえ。オレなんざア、ここ三十年、魚のウロコを剃るのにこれッぱかしも魚の肌を傷つけたことがなかつたな。カミソリなんてえものは魚屋の庖丁にくらべれば元々器用に扱うようにできてるものだ。オツ。姐ちゃん。お前の方が手ざわりも柔かいし、カミソリの当りも柔かくツていいや。たのむぜ」

そこで若い娘の弟子が仕事にかかろうとすると、源サンが目の色を変えて、とめた。

「よせ！ やツちやいけねえ」

「旦那がやりますか」

「やるもんかい。ヤイ、唐変木。そのデコボコ頭はウチのカミソリに合わねえから、よそへ行つてくれ」

「オツ。乙なことを云うじやないか。源次にしては上出来だ」

「テメエの面ア見るとヒゲの代りに鼻をそいでやりたくなツちまわア。鼻は大事だ。足もとの明るいうちに消えちまえ。今日限り隣のツキアイも断つから、そう思え」

「そいつは、よくねえ。残り物の腐った魚の始末のつけ場がなくならア」

「なア。よく、きけ。キサマの口の悪いのはかねて承知だが、云つていいことと、悪いこととあるぞ。ウチの正坊しょうぼうの将棋がモノにならねえと云つたな」

「オウ、云つたとも。云つたが、どうした」

それまで落ちつき払っていた金サンが、ここに至って真ッ赤になって力みはじめたのは、曰くインネンがあるらしい。

「お前に将棋がわかるかよ」

「わかるとも。源^{げんとこ}床の鼻たれ小僧が天才だと。笑わせるな。町内の縁台将棋の野郎どもを負かしたぐらいが、何が天才だ」

「町内じゃないや。人口十万のこの市に将棋の会所といえは一軒しかねえ。十万人の中の腕の立つ人が一人のこらずここに集つてきて将棋をさすのだ。縁台将棋とモノがちがうぞ。正坊はな。この会所で五本の指に折られる一人だ」

「そこが親馬鹿てえものだ。碁将棋の天才なんてえものは、紺ガスリをきて鼻をたらして
いるところから、広い日本で百人の一人ぐらいに腕が立たなくちゃいけないものだ。この
市の人間はただの十万じやないか。十万人で五本の指。ハ。八千万じやア、指が足りなす
ぎらア。八千万、割ることのオ十万、と。エエト。ソロバンはねえかな。八千万割ること
のオ十万。八なアリ。マルなアリ。またマルなアリ。また、マル、マル、マル。いけねえ。
エエト」

金サンは手のヒラをだして、指で字をかいて勘定した。

「八千万割ることの十万で八百じやないか。そのまた五倍で、五八の四千人。ざまアみやがれ」

「十四の子供だ。たった十四で四千人に一人なら立派な天才というものだ。なア。お前んとこの長助はどうだ。ゆくゆくは職業野球の花形だと。笑わせるな。親馬鹿にて候とテメエの顔に書いてあらア。学業もろくにやらねえでとツぶり日の暮れるまでタマ投げの稽古をしやがって、それで、どうだ。全国大会の地区予選の県の大会のそのまた予選の市の大会に、そのまた劈頭の第一予選に乱射乱撃、コテンコテンじやないか。町内の学校だ。寄附をだして応援にでかけて、目も当てられやしねえ。親馬鹿の目がさめないのがフシギだな」

「野球は一人でやるもんじやねえや。雑魚が八人もついてりや、バックのエラーで負けるのは仕方がねえ。長助は中学二年生だ。二年ながらも全校の主戦投手じやないか。その上に三年生というものがありませんが、長助のピッチングにかなう者が全校に一人もいねえな」

「全校たつて女もいれてただの四五百じやないか。このせまい町内だけをチラツと見ても、ブリキ屋の^{せがれ}、菓子屋の次男坊、医者の子供、フロ屋の三平、ソバ屋の米友、鉄工所のデ

ブ、銀行の給仕、もう、指の数が足りねえや。長助なんぞの及びもつかない凄いな。タマを投げる奴は、くさるほどいらあ」

「フロ屋の三平、三助じゃないか。ソバ屋の米友は出前持だ。鉄工所のデブは職工じゃないか。みんないい若い者だ。大人じゃないか」

「大人が、どうした。天才てえものは、鼻たれ小僧のうちから、広い日本で四千人に一人でなくちゃアいけねえものだ。長助のへろへろダマにまさるタマを投げる者なら、人口ただの十万のこの市だけでも四千人ぐらいはズラリとガンクビが揃ってらあ。八千万の日本中で何億何万何千何番目になるか、とても勘定ができやしねえ」

「へ。いまだにカケ算ワリ算も満足にできねえな。お前は小学校の時から算術ができたな。どうだ。九九は覚えてるか。な。碁将棋は数学のものだ。お前の子供じゃあ、とてもモノになる筈がねえや」

「お前はどうか。鉄棒にぶら下ると、ぶら下りッぱなしだったな。牛肉屋の牛じゃああるまいし、それでも今日テンビン棒が一人前に担げるようになったのはお天道サマのお慈悲だな。その倅が、クラゲの運動会じゃああるまいし、職業野球の花形選手になれるかよ。草野球のタマ拾いがいいところだ」

「今に見てやがれ。十年の後には何のナニガシと天下にうたわれる花形選手にしてみせるから」

「十年の後にはウチの正坊は天下の将棋の名人だ。オイ。野郎の背中に塩をぶちまいて追ッ払っちまえ。縁起でもねえ」

こういうワケで、両家の国交断絶と相成ったのである。

源床が魚屋の発狂を云いふらすこと

当節は日本中に豆天才がハンランしているようである。目の色を変えているのは親だけだ。そのほかの誰も天才だとは思わない。むろんそれで月謝を稼いでいる先生も。ヴァイオリンの天才。バレーの天才。歌謡曲の豆天才。どれと云って親の熱に変わりはないが、特に熱病がハデに露出しているのは野球なぞかも知れない。

「今日の打撃率は三割三分三厘だ。相手のピッチャーは年をくツていやがるから、今日はこれでよしとしておこう」

なぞと、親が河原や原ツぱの子供野球の監督然とスコアをとって、その日の出来によつ

ては夕食にタマゴの一つもフンパツしようというコンタンである。

「子供が野球の練習に精をだすのは将来のためだからいいけどさ。お前さんが仕事をうちやらかして子供の野球につきあつちや困るじやないか。おサシミの出前を届けに行つて、三時間も帰りやしない。小僧が二人もいるのに、お前さんが出前を届けるこたアないよ。明日からは出前にでちやいけないよ」

「そうはいかないよ。来年度の新チームを編成したばかりだ。次週の土曜から新チームの県大会の予選がはじまるんだよ。長助の左腕からくりだす豪球が、ここんどこコントロールが乱れているから、ミツチリ落着いた練習をさせなくちやアいけねえ」

「お前さんが長靴をはいて、自転車に片足つつかけて、オカモチをぶらさげて垣根の外から首を突きのおぼしているから、落着いてタマが投げられやしないって長助がごぼしているよ。お前さんが野球の名人で長助に手ほどきしなきゃならないというなら話は分るけど、五間とタマを投げることもできないくせにさ。オカモチぶらさげて、自転車に片足つつかけて、電柱にもたれてさ。三時間も垣根の外から首を突きだしてるバカはいないよ」

「うるせえな。隣の源次をみるよ。紋付をこしらえたよ。結婚式も借着の紋付ですました野郎が、新調の紋付をきて、商売を休んで、鼻たれ小僧の手をひいて、静々と将棋大会へ

でかけやがったじゃないか。それで負けて帰りやがった。ざまアみやがれ。オレが三時間ぐらい突っ立ってるのは何でもねえ」

ひと月ほど前に、床屋の正坊が新聞にでた。県の将棋大会というのがあって、各町村から腕自慢が百人ほども集った中に、最年少の正吉もいたのである。二回戦で敗れたが、特に敢闘賞をもらった。その記事と、対局中の写真までのったのである。

町内から将棋の天才少年が現れたというので、ひとしきり評判がたった。面白くないのは金サンである。

「将棋なんてえものは大人も子供も変りなくできるものだ。将棋盤を頭上に持ち上げて我慢くらべをするワケじゃアないからな。野球は、そうはいかねえや。まず身体ができなくちゃアいけねえ。巨人軍の川上という岩のように立派な身体の手選手が、力が足りない、もつと力が欲しいと嘆いてる始末じゃないか。まず第一に長助の背丈を延ばして、ふとらせなくちゃアいけない。滋養の物を三度三度食べさせて、毎日欠かさず風呂へ入れて——」

「ふやかすツモリかい」

「バカヤローめ。草木も水をかければ生長が早い。根が四ツ足のケダモノでも、水中にいるからクジラもカバも凶体がひと廻りちがってらア。水てえものは、ふとるものだ。いか

に商売とはいえ魚だけ食べさせてちやア、大選手の身体はできない。牛肉とモツとタマゴを欠かさず食べさせなくちやアいけない。床屋の鼻たれ小僧に負けちやア、御先祖様に顔向けができない」

こういう心掛けでセツセとやるから、子供は大喜びである。うまい物を食って、存分に野球がたのしめて、学問などはできなくとも親の文句は食わないから、これぐらい結構なことはない。ところが金サンは野球というものを全然自分ではしたことがない人だから、こういう人に限って、人の講釈の耳学問や、書物雑誌などに目をさらして、一生ケンメイに理窟で野球を覚えこむ。選手が五年かかっても実地には身につけがたいことを、理窟だけなら半日で覚えられるから、本や雑誌を山と買いこんで東西の戦記や理論に目をさらした金サンの講釈のうるさいこと。

「アメリカの大投手の伝記によると、投手は第一に腰を強くしなくちやアいけない。それにはランニングが第一だと語っているな。日に五哩マイルも駈けてるぞ。それも遊び半分には駈けてるんじゃない。わざと坂道の多い難路を選んでアゴをだすほど猛烈に力走して腰を鍛えているのだな。キサマも、それをやらなくちやアいけない。オレが自転車についてやるから、あすの朝からはじめろ」

魚屋だから、朝は早い。早朝に長助を叩き起してランニングにつれだす。自分は自転車で汗水たらして坂道をこぐ。早朝の路上にはこれに似た人々がすれちがうが、それは人間をつれて走らせてる人々じやなくて、犬をつれてるところがちがつている。

「投手の身体をつくるには、マキ割りなぞが大変よろしいと書かれているな。お前は身体のできるサカリだから、こいつをやらなくちやアいけない」

わざわざ丸木を買いこんで、夕方からマキ割りをやらせる。裏庭にはマキが山とつみあげられて、表は魚屋、裏はマキ屋のようである。

これを見て、よろこんだのは隣家の床屋の源サンである。客のヒゲを当りながら、「隣の魚屋はどうとう頭へきましたよ。そう云えば、小学校の時から、どうも、おかしいな、と思うことがありましたよ」

「小学校が一しかい」

「ええ、そうですとも。魚屋の金公といえは泣虫の弱虫で有名なものでしたよ。寝小便をたれるヘキがありましたね。奴めの亡くなった両親が、それは心配したものですよ。それやこれやで益々泣虫になったんですな。それが、あなた、大人になったらガラリと変りやがつて、一ぱし魚屋らしくタンカなぞも切るばかりじやなく、変に威勢がよくなりやがつ

たんですよ。やっぱり脳天から出ていたんですな。二三年前から子供の野球に熱を入れたあげく、とうとうホンモノになりましたよ。朝はくらいうちから自転車にのって、犬と同じように子供をひいて走りまわる。夜は裏の庭で子供にマキ割りをやらせてますよ。自分は横に突つ立つて、腕組みをしながら、ジイーツと見てますよ。物を云わないね。真剣勝負の立会人だと思やマチガイなしでさア。雨が降っても欠かしたことがないから、裏の庭はマキの山でいっぱいでした。あのマキを何に使うつもりだろうね」

「内職じゃアないのか」

「冗談じゃアないよ。魚屋がついでにスシを商うとか、夏は氷を商うぐらいの内職はするでしょうが、マキ屋を内職にすることはないよ。マキ割りの横に腕組みをしてジイーツと立つてる姿を見てごらんさい。生きながら幽霊の執念がこもってまきさア。凄いの、なんの。見るだけでゾオーツとしますよ。にわかにならして、マキ割りをふりかぶって、一家殺しをやらなきやアいいがね」

「フーン。穏やかじゃないね」

「ええ、も、穏やかじゃありません。ワタシヤ心配でね。ついでにこツちへ踏みこまれちや目も当てられない。猛犬をゆずりたがってるような人はいませんかア」

床屋は噂の発祥地。申分のない地の利をしめているから、源サンの流言はたちまち町内にひろがった。おくればせながら金サンの耳にもとどいたから、

「ウム。このデマは源次の野郎が張本人にきまつている。よし。覚えてやがれ。今に仕返ししてやるから」

金サンは大そう腹をたてた。

易者にたのんで豆名人を探すこと

魚屋の裏に金サンの家作があつて、トビの一家が店借りをしている。そのまた二階を間借りしているのが天元堂という易者であつた。天元堂は窓の下に日々カサを増していくマキの山を見るにつけて、これをなんとか安く買って一モウケしたいものだと思つた。一日魚屋を訪れて、

「旦那、裏のマキはモツタイないね。旦那のことだから、あれを売って商売なさる筈はないが、どうでしょうね。あれを安く、元値でゆずって下さいな。私に一モウケさせて下さい。恩にきますよ」

金サンは天元堂が市では一二を争う将棋指しだということを思いだしたから、

「お前は将棋が強いんだってね」

「それで身を持ちくずしたこともありましてね。賭け将棋に凝って、もうけるよりも、損をしました」

「それじゃアよほど強かろう。どうだい。あの床屋の鼻たれは、いくら強いか」

「子供にしちやア指しますが、私もあの年頃にはあのぐらいに指しましたよ」

「へえ、そうか。すると、子供であの鼻たれを負かす者も珍しくないな」

「そうですね。あれよりも二三年下、小学校の五六年であれを負かすのも珍しくはありません。東京の将棋の会所には、同年配ぐらいで二枚落してあの子を負かすのが一人や二人はいるものですよ」

「そいつは耳よりの話だな。それじゃア、こうしようじゃないか。このマキを元値の二割引きで売ってやるから、東京で将棋の豆天才を探してもらいたいな。床屋の鼻たれよりも二三年下で、あの鼻たれをグウの音もでないほど打ち負かすことのできる滅法強い子供だな。しかし、なんだな。見たところは甚だ貧弱で、脳膜炎をわずらったことがあるようなナサケないガキがいいなア。この町へつれてきて、大勢の見物人の前で床屋の鼻たれと試

合をさせて、ぶち負かしてやるんだから」

「それじゃア二割引きでマキを売って下さいますか。ありがたいね。モウケ仕事ですから、それでは東京へ参つて、お言葉通りの豆天才を探して参りましょう。しかし、ねえ。脳膜炎をわずらつたことがあるようなのが居るといいけど、こればツかりは請合えないね。ま、できるだけ貧弱そうな物を物色してつれて参りますから、マキの方は何とぞ宜しくお願い致します」

そこで天元堂は豆天才を探しに東京へでかけた。以前懇意の将棋会所を訪ねて訊いてみると、

「ウチにも少年が三人手伝つてくれているが、これはさる高段の先生から預つたものだから、私の一存で貸してあげるワケにはいらない。それに年もちよつとくつている。十二三の子供といえ、ウム、そうだ。私はまだその子供と指したことがないから棋力の程は知らないが、向島むこうしまにバタ屋の倅で、滅法将棋が強くツて柄の悪いのが一人いるそうだ。柄が悪いというのは、子供のくせに賭け将棋で食つてゐるそうだね。そういう奴だから、先生に世話してやろうという親切な人も、ひきとつて育ててやろうという先生もないが、小さいガキのくせに、力は滅法強いらしいな。この会所にもそのガキにひねられて三十円

五十円百円とまきあげられた人ならタクサン来ているから、きいてあげよう」

二三の人にきき合せてくれると、いろいろのことが分った。浅草の某所に賭け将棋を商売にしているような柄の悪いのが集っている賭場のような会所があつて、そのガキはそこに入りびたつていたが、今ではそれも門前払いを食わされるようになってしまったというのである。というのは、だんだんカモがいなくなつてモウケがなくなつたから、懐中物なぞをチヨイ／＼失敬する。将棋ばかりでなく万事につけて機敏で手先が器用であるから、このガキが現れるとオチ／＼油断ができないので、門前払いを食わされるようになってしまったのだそうだ。

「それはまた大へんなガキだね」

「しかし、滅法強いそうだけ。賭け将棋の商売人をカモにしていたそうだからね」

「呆れたガキだ」

「ここできくと、わかるそうだけ」

その所番地を教えてくれた。天元堂がそこへ行つてみると、そこはバタ屋集団で、団長さんは頭をかきながら、

「あのガキですかい。たしかに本籍はここだね。どこをのたくつてるか、誰にも分りや

しないよ。ま、きいてあげるけどね。オーイ。メメズ小僧は、いねえだろうな？ エ？
いる？ おかしいね。なんだって、いやがるんだろう。え？ メメズ小僧ですか？ あい
つの名ですよ。どこにもぐつてやがるか分らないから、みんながこう呼んでるんですよ。
本当の名前なんぞ有るかどうか分りやしないね。あそこが小僧のウチだから、のぞいてご
らんなさい」

小僧のウチをのぞいてみると、貧相な汚い子供が、何かせつせと細工物をやってる。革
の指輪に先の曲った針金をつけているのである。甚だ性質のよからぬ道具らしい。天元堂
がのぞきこんでると、小僧は目をむいて、

「あっちへ行けよ」

「変った物をこしらえてるな」

「うるせえや」

「お前のところに将棋盤はあるか」

「……………」

「三十円賭けてやろうじゃないか」

「ほんとか？」

「むろんだ」

「へッへ」

小僧はにわかにはくそ笑んで、天元堂を招じ入れたのである。小僧愛用の板の盤で指してみると、たしかに強い。天元堂が角を落して、三番棒で負かされた。彼と同格ぐらいの力があるらしい。床屋の正坊なら、小僧が二枚落しても危いぐらいだ。賭け将棋の商売人をカモにしていただけあつて、生き馬の目をぬくように機敏で勝負強い。タルミがない。

そのくせ、見れば見るほど、貧相である。まさしく脳膜炎の顔である。まるでナメクジのようにダラシがなく溶けそうな顔だ。シマリがない。ジメく〜といつもベソをかいているような哀れな様子である。

「造化の妙だなア。生き馬の目をぬくような機敏な才がどこに隠されてるか、とうてい外見では見当がつけられない。なるほど、これじゃア人々が油断する。賭け将棋の商売人がひツかかるのもムリがないし、彼らが懐中物をすられるのもフシギがない。生き馬の目をぬくために生れてきたような小僧だなア。一見したところ、否、ジイーツとみつめても、ナメクジよりもダラシなくのびてやがるだけじゃないか。メメズ小僧とはよく云った。ドブから這い上つたような奴だ。アツ。いけねえ。懐中物は無事かな？」

と、天元堂はハツと自分の胸を押えて、目玉を白黒させなければならぬ始末であった。あつらえ向きのガキを発見したから、天元堂はよろこんだ。さつそく立ち帰って、これを金サンに報告したから、金サンも有頂天になつて、よろこんだ。

「ありがてえ。はやくそのガキを一目見たいね。つれて帰ってくればよかつたのに」

「イエ、それがね。つれて帰れば私のウチへ泊めなくちやアならないでしょう。私やあのガキと同居するのはマツピラですよ。カツパライを働くためにこの世に現れた虫のような薄気味わるい小僧なんですよ。旦那のウチへ泊めるなら、私やいつでもつれてきますがね」

「それはいけないよ」

「そうでしょう。ですから今度の日曜の一番で立つて、つれてきます。その手筈をたててきましたから。ヒル前には戻れますから、対局は午後からということにして、もつとも、東京行きの終電事に間に合うように指し終らなくつちやアね。私やあのガキをウチへ泊めるぐらいなら、ホンモノのメメズと一しよにドブへねる方がマシだよ」

そこで金サンは隣の床屋へでかけた。

「オ。源的。そつぽを向いちやアいけねえや。今日は話の筋があつてきたんだ。オレの頭が狂っているか、お前の頭が狂っているか、実地にためしてみようじゃないか。オレが東

京からガキを一匹つれてくるから、正坊と将棋をやらせてみようじゃないか。そのガキは正坊よりも二ツ年下だが、ガキの方が角をひくと云ってるぜ」

「二ツ下といえ、小学校の六年だな」

「そうだと。もつとも、学校とは縁が切れている。脳膜炎をわずらって、それからこつち、学校には上つていないそうだ」

「正坊に角をひくなら初段だが、小学校の六年生に初段なんているもんかい」

「東京にはザラにいるらしいや。魚河岸の帰りにちよいと見かけたものでな。オレの町には正坊てえ天才がいて、町の大人には手にたつ相手がいなくなって困っているが、ひとつ指しに來ないかと云つたところが、田舎の子供なら、ま、角を落して指してやろう。なんなら二枚落して指してやろうと、こういうわけだ」

「偉い先生の弟子なのか」

「そんなもんじゃないそうだ。しかし、きいてみると、こんなガキは東京では珍しくないそうだな。東京の偉い先生は、このぐらいのガキには見向きもしないそうだけ。六年生で初段ぐらいじゃ、とてもモノにならないそうだ。三ツ四ツでコマを掘りはじめて、五ツ六ツでバタ／＼と大人をなで斬りにして、小学校一年の時には初段の腕にならなくちゃア

けないものだそうだな。中学二年にもなつて初段に大ゴマ落してもらうようなのは、将棋の会所の便所の掃除番にも雇つてくれないそうだ。この日曜につれてくるが、角をひいて教えてもらつちやアどうだな」

「よし。正坊が勝つたら、キサマ、どうする。ただカンベンして下さいだけじゃアすまないぞ」

「アア、すまないとも。その折はチンドン屋を先頭に立てて、魚屋の金太郎はキチガイでござんす、という旗を立てて、オレが市内を三べん廻つて歩かアな」

「よし。承知した。日曜につれてこい」

話がきまつたから、金サンは牛肉屋の二階広間を予約して、当日華々しく対局を行う手筈をたてたのである。

戦おわりぬのこと

いよく対局の当日になったが、こまつたことには、この日は少年野球の準々決勝があつて、ちょうど午後の試合に長助が出場するのである。おまけに相手チームには石田とい

う県下第一と評判の高い投手がいる。

「どうも、変だな。長助の評判が立たなくって、石田なんてえのが県下少年第一の投手なぞとは腑に落ちないな。新聞社が買収されたんじやねえのか。そんな筈はないじやないか」「ところが、そうじやないらしいですよ。見た人がみんな驚いて云ってますよ」

金サンの店の小僧がこう答えた。

「え？　なんて云ってる？」

「凄いつてね」

「凄いつて云えば、長助が凄いじやないか」

「イエ。てんで問題にならない」

「ナニ？」

「イエ。見た人がそう云うんですよ。てんで問題にならないツてね。スピードといい、カーブといい、コントロールといい、ケタがちがうツて。町内の見てきた人がみんなそう云ってますよ。明日は町内の学校はてんで齒がたたないツてね。応援に行っても仕様がないやなんて、みんなそう云ってましたよ」

「誰だ、そんなことを云ったのは。長助にヤキモチやいてる奴だろう」

「受持の先生も、そう云ってましたよ」

「あいつは長助を憎んでいるらしいな。第一、町内の奴らには、投球の微妙なところが分りやしねえ。長助の左腕からくりだすノビのある重いタマ、打者の手元でキュツとまがる。このタマの凄さは打者でなくちやア分りやしねえよ。よーし。明日の試合を見てみやがれ」
思わぬ伏兵が現れた。こうなると、自分の俸のことだから、メメズ小僧と正坊の対局よりも心配だ。町内の者も、母校の生徒も、応援に行ってもムダだから行かないと云ってる。そうだから、金サンは亢奮のためにその前夜は眠ることができない。

「ベラボーめ。県下の少年選手なんぞが、長助の投球がうてるかい。高校野球の選手だって、めつたに歯が立つ筈がねえや。この夏休みの猛練習以来、長足の進歩をしていることを知らねえな」

金サンは翌朝未明に窓の外から二階の天元堂を呼び起して、

「マゴ／＼してると一番電車に乗りおくれるじゃないか」

「まだ、早いよ。四時前ですよ」

「オレはなア。今日の午後は長助の野球の方に行かなくちやアならねえ。野球が終ると大急ぎで駆けつけるが、それまでは将棋の方に顔がだせないから、お前が代理でござんすと

云つて、よろしくやつてくれ」

「それは、ま、よろしくやるのはワケはないが、旦那もせっかくはりこんだくせに、惜しいねえ。マキはたしかに二割引で売つて下さるんでしようね」

「売つてはやるが、メメズ小僧は負けやしまいな」

「負けるもんですか。マキの方さえたしかなら、旦那はどこへでも行つてらっしゃい」

一方、床屋の源サン。これは夜更かし商売だから、当日もかなりおそくまで眠つた。顔を洗つて、神ダナと仏壇を拜む。いつものことで、今日だからというわけではない。

「正坊はどうした？」

「午^{ひる}まで遊んでくると云つて、でかけましたよ」

「フン。落着いてやがるな。それでなくちやアいけねえ」

「今日は大丈夫かしら」

「大丈夫だとも。正坊の二ツ年下で、角をひいて正坊に勝てるような大それたガキがいたまるかい。だから正坊にそう云つてやつたんだ。お前が勝つにきまつてるから、あせつちやいけない。ただ年下の奴が角をひくんじゃカツとして腹が立つ。腹を立てちやアいけない。静かな落着いた気持で指しさえすりやア負ける道理がないんだとな」

「じゃア大丈夫ね」

「むろん、大丈夫だ。金太郎の野郎め。今日こそはカンベンならねえ。チンドン屋を先頭に、金太郎はキチガイでござんすという旗をたてて、市内を三べん廻らせてやる」

定刻になると、源サンはセビロを一着して、むろん弟子にヒゲを当らせ頭にはポマードをたっぷりつけて、正坊をつれて会場へのりこんだ。

金サンも当日はセビロである。むろん靴もゴム長ではない。青のサングラスをかけて、ネット裏に陣どつた。いよゝゝ長助のチームが出場の番になったが、その入場に誰も拍手した者がない。応援団が一人も来ていないのだ。相手チームの入場にはけたたましい声援と拍手が起つた。応援団ばかりじゃなしに、満場の大半が拍手を送っている。優勝候補筆頭の期待のチーム、県下のホープなのである。

「面白くねえな。しかし、今に見やがれ。吠え面かかしてやるから」

金サンは満場のバカどもに一泡ふかせてやろうと、口に美声錠びせいじょうをふくんで時の至るを待ちかまえた。ところが、である。試合がはじまってみると、実に意外である。意外、また意外である。石田投手の物凄さ。身長は長助と同じぐらいたが、スピードは段がちがう。コントロールはいいし、カーブを投げてもスピードが落ちない。金サンはカーブというも

のは曲る代りにスピードが落ちてフワ／＼浮いてくるものだと思っていたのである。

「ウーム。凄い野郎だ。別所に負けないスピードだ」

金サンが思わず嘆声をもらしたので、近所の人々が笑いをもらした。金サンはムキになつて、隣りの人に食つてかかつた。

「あいつは超特別の大天才投手だよ。凄いウナリじゃないか」

「スポンジボールだからね」

「なアに別所だつて、あんなもんだよ。カーブだつて目にもとまらない速さじゃないか」

「どうかしてるな。このオジサンは。オジサンはあの学校の先生かい？」

近所にいた子供がきいた。その連れの子供が云つた。

「あのピッチャーのオヤジだろう。あんまり変テコなこと云いすぎらア」

すると、みんなが笑つたのである。しかし、まさかアベコベのオヤジとは誰も気がつかない。金サンはいささか蒼ざめた。バッタ／＼と三回まで長助チームは全員三振であつた。長助はしきりに打たれて三回までに五点とられた。

「よく打ちやがるなア。あのピッチャーだつてうまいんだがなア。あの左腕からくりだす豪球——」

「豪球じゃないや。へろくじじゃないか」

「バカ。相手のピッチャーが豪球すぎるから、そう見えるのだ」

「ウソだい。あんなヘナチヨコピ、珍らしいよ、なア。クジ運がよかったから準々決勝まで残れたんだい。別の組だったら一回戦で負けてらア。ほら、ごらんよ。石田が降りて、第二投手がでてきたよ。第二投手でもあのヘナチヨコの倍も速いや」

「なるほど、速い。そろっているな。超少年級。プロ級じゃないか」

「バカ云つてらア」

長助チームは第二投手も全然うてず、五回にして十一対〇。コールドゲームであった。金サンは茫然。夢からさめたように立ち上った。帰って行く長助チームの姿を認めて追いついてみると、彼らは敗戦などどこ吹く風、まるで負けたのが愉しそである。

「全然かすりもしねえや。速えなア」

敵に感心して、よろこんでいる。金サンは部長の先生に話しかけた。

「運がなかったですね。あんな強いのにぶつかっちゃアね」

「イエ。運がよかったですよ。ここまで来れたのがフシギですよ。一回戦で負けてるのが本当なんですな」

「そんなにみんな強いですかね」

「つまりウチが弱すぎるんじゃないかな。ピッチャーがいらないんです。こんなのが二年つづけて主戦投手ですからね。左ピッチャーという名ばかりで全然威力がないのですから」

部長はキタンのない意見をのべた。金サンは言葉がなかった。長助を見ると、さすがに苦笑している。金サンはようやく目がさめたのである。にわか疲労が深かまってしまった。金サンが牛肉屋の二階へ来てみると、誰もいない。女中が掃除をしていた。

「もう、すんだのかい？」

「ええ、二時間足らずですんじやいました」

「どうだった？」

「床屋の子供が三番棒で負けたそうですよ」

「そうだろうな。天下は広大だ。天元堂はどうしたえ？」

「小僧をひきずって停車場へ行きましたよ。この町へ置いといちやア物騒だとか何とかブツ／＼云いながらね」

金サンは源床の前に立った。本日休業の札がかかげられて、カーテンがおりている。金サンは露地を通って床屋の裏口から声をかけた。源サンがねころんでるのが見えたからで

ある。

「源的。すまねえ。そう睨んじやいけねえよ。あやまりに来たんだ。まったく、すまねえことをした。しかしだなア。お前もガツカリしたろうが、こうした方がよかつたのかも知れないぜ。ウチの長助もコテン／＼、問題にならねえや。未来の花形選手どころじゃねえや。天下は広大だてえことが、つく／＼分つたなア。早く目がさめて、まア、よかつたというものだ」

源サンも敵の来意がのみこめたので、上体を起して背のびをした。そして、云つた。

「バカな夢を見たものだ」

「まつたくだ」

「長助もコテン／＼か。アツハ。おかしくも、なんともねえや」

「本日休業か。損をかけたな」

「お前、いくらつかつた？」

「アツハ。おかしくも、なんともねえ」

金サンが店へ戻つてみると、天元堂が裏庭から自分の二階ハマキを運んでいる最中であつた。ネジリ鉢巻に尻をはしよつて忙しくやっている。

「ヤ、旦那。無事、すみませしたぜ。角落ちで、見事に三番棒でさア」

「そうだってな」

「マキは運んでいいでしょうね」

「うるせえな。運んでるじゃないか」

「ですから、運んでいいでしょうね」

「早く運んじまえ……」

金サンは割れ鐘のような声で怒鳴ると、家の中へもぐりこんでしまった。

青空文庫情報

底本：「坂口安吾全集 14」筑摩書房

1999（平成11）年6月20日初版第1刷発行

底本の親本：「キング 第二九巻第一四号」

1953（昭和28）年12月1日発行

初出：「キング 第二九巻第一四号」

1953（昭和28）年12月1日発行

入力：tatsuki

校正：noriko saito

2009年4月19日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

町内の二天才

坂口安吾

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>